

## 挿絵と構造 ——昔話の挿絵は構造を示す

西口拓子\*

はじめに

魔法の馬，鷹の背，空飛ぶじゅうたん，空飛ぶ船，悪魔の背中——これらは、昔話の主人公が目的地に向かう際に乗るもので、話によってバラエティーに富んでいる。<sup>1)</sup> それでも各話には不変なものがある。主人公が目的地へ運ばれるということである。こうした不変要素に着目したのがロシアのウラジーミル・プロップ（1895-1970）である。彼はアレクサンドル・アフナーシェフが編纂した『ロシア昔話集』（1855-63年）<sup>2)</sup> を分析した結果、昔話に共通する構造を見出した。

プロップがその際に分析対象としたのはいわゆる「魔法昔話」に限定される。しかしながら、プロップの構造は、グリム童話の「狼と七匹の子やぎ」——これは「魔法昔話」ではなく「動物昔話」に分類される——にも当てはまるのである。「狼と七匹の子やぎ」は、グリム童話の中でも人気のある話で、挿絵も数多く描かれてきた。本稿では、挿絵とプロップの構造に着目しつつ、「狼と七匹の子やぎ」を考察する。

そもそも、「魔法昔話」や「動物昔話」とはどのような区分なのだろうか。昔話研究における分類に関しては、本稿の第1節で考察する。第2節

---

\*専修大学経営学部准教授

では、グリム童話の「狼と七匹の子やぎ」のあらすじを挿絵とともに紹介する。その上で、第3節において、プロップの論に基づき「狼と七匹の子やぎ」の構造を分析する。

## 1. アールネ・トンプソンの『昔話のタイプ・インデックス』とプロップの構造論

19世紀にグリム兄弟が編纂した昔話集（通称『グリム童話集』、初版は1812/15年）に触発され、各国で多数の昔話が集められた。そこで明らかとなったのが、各地の昔話の類似性である。20世紀に入り、これらの昔話を分類し、国際的に参照可能となるよう整理する試みがなされた。その嚆矢が、1910年にフィンランドのアンティ・アールネが作成した『昔話のタイプ・インデックス』<sup>3)</sup>であった。これにアメリカのステイス・トンプソンが番号を多数追加し、1928年に改訂版を出した。これをトンプソン自身が拡充し、1961年に『昔話のタイプ・インデックス』第三版として出版した。<sup>4)</sup>ここでの分類番号をATもしくはAaThという略号に付けて示したものが、国際的に使用されてきた。2004年には、ドイツのハンス＝イェルク・ウーターがさらなる改定版を出し、<sup>5)</sup>ATUと略記して使われるようになった。『昔話百科辞典』<sup>6)</sup>ではAaTh/ATUと併記しているが、煩雑になるため、本稿ではAT番号のみを示す。

アールネ・トンプソンの『昔話のタイプ・インデックス』においては、昔話は以下のように、大きく5つに分けられる。（カッコ内の数字は割り当てられたAT番号である。）

- I. 動物昔話 Animal Tales (1-299)
- II. 本格昔話 Ordinary Folk-Tales (300-1199)
- III. 笑話と逸話 Jokes and Anecdotes (1200-1999)

## IV. 形式譚 Formula Tales (2000-2399)

## V. どれにも分類できない話 Unclassified Tales (2400-2499)

I. からIV. までのカテゴリーには、それぞれ下位区分があり、II. の「本格昔話」は、A~Dの4つに分けられる。Aは「魔法の話」(Tales of Magic)で、300-749番が割り当てられている。プロップが考察対象としたのが、アフナーシェフの昔話のうち、ここに分類されるものであった。グリム童話の良く知られた話も、多くがここに分類される。<sup>7)</sup> 例えば、「ヘンゼルとグレーテル」はAT327A、「赤ずきん」はAT333である。

「魔法の話」にはさらに7つの下位区分が設けられており、はじめの300-399番は「超自然的な敵」(Supernatural Adversaries)である。アールネ・トンプソンの分類では、「ヘンゼルとグレーテル」と「赤ずきん」はどちらも、この「超自然的な敵」に属する。「ヘンゼルとグレーテル」の敵は魔女であるから、まぎれもなく「超自然的」だろう。「赤ずきん」と「狼と七匹の子やぎ」では、どちらも狼が敵であるが、「狼と七匹の子やぎ」にはAT123-124が割り当てられており、これはI. の「動物昔話」に含まれ、「赤ずきん」(AT333)とは別のカテゴリーに分類されている。登場するのが動物であるから、「動物昔話」に区分されているようなのだ。それでも話の流れが「赤ずきん」に似ているだけでなく、「狼と七匹の子やぎ」の挿絵ではやぎ達が擬人化されて描かれることも多い(擬人化に関しては第2節で言及する)ことなどを考えあわせると、釈然としない部分が残る。

アールネ・トンプソンのインデックスの分類に対しては、曖昧であるとか、恣意的であるといった批判がこれまでもなされてきた。プロップは、その欠点を「分類に一貫性がない」、「インデックスから昔話を探すのはやさしいが、昔話からインデックスの番号を探し出すのはじつにむづかしい」と指摘している。<sup>8)</sup> アールネ・トンプソンの番号のおかげで、アーカイブで類話を探すことは容易になったのだが、分類に関する明確な原則が見

当たらないため、ある話の AT 番号を探し出すことは容易ではないのである。<sup>9)</sup> プロップは、アールネ・トンプソンのインデックスが「実際に役立つ便覧として重要」<sup>10)</sup>であることを認めつつも、こうした分類をする以前に、それらが同じ型である必要がある、ということを描したのである。そして、自身は昔話の中の不変要素に着目した研究を進めたのだった。

プロップは、アフナーシエフの『ロシア昔話集』の50から151番までの話、すなわち「魔法昔話」に絞って、分析を行った。そこから導かれた結論は次のものであった。

1. 昔話の恒常的な不変の要素となっているのは、登場人物たちの機能である。[中略] これらの機能が、昔話の根本的な構成部分である。
2. 魔法昔話に認められる機能の数は、限られている。
3. 機能の継起順序は、常に同一である。
4. あらゆる魔法昔話が、その構造の点では、単一の類型に属する。<sup>11)</sup>

具体的な機能の数もプロップは挙げているのだが、詳細は、「狼と七匹の子やぎ」の分析とあわせて第3節で考察する。

さて、これらの研究成果を、プロップは、1928年に『昔話の形態学』と「不思議な民話の変形」という論文に発表している。これらがロシア語で書かれていたこともあり、プロップの理論が欧米で広く知られるようになったのは、1958年に『昔話の形態学』の英語訳<sup>12)</sup>が出版されて以降であった。1966年にイタリア語、1968年にポーランド語（抄訳）、1970年にフランス語、1972年にドイツ語<sup>13)</sup>と日本語<sup>14)</sup>というように、各国語訳が続けて出版されたことから、当時の反響の大きさが分かる。論文「不思議な民話の変形」も、1965年にフランス語、1971年に日本語、1972年にドイツ語に翻訳されている。<sup>15)</sup>

## 2. グリム童話「狼と七匹の子やぎ」のあらすじと挿絵

次節で構造分析を行う前に、『グリム童話集』第七版（最終版）<sup>16)</sup>のテキストに従い、「狼と七匹の子やぎ」のあらすじを確認しておく。第七版は、グリム兄弟自身が手がけた最後の版で、1857年に刊行された。これは二巻から成り、<sup>17)</sup>各巻の巻頭に口絵が一枚ずつ付けられている他には挿絵はない。<sup>18)</sup>第一巻の口絵として「兄と妹」（グリム童話11番の話）の絵が、第二巻の巻頭には、語り手フーマンの肖像画が掲載されている。どちらもグリム兄弟の弟で画家のルートヴィヒ・エーミール（Ludwig Emil Grimm 1790-1863）が描いたもので、『グリム童話集』第二版（1819年）以降、巻頭を飾っている。グリム童話は、他の編者によっても多数刊行されたが、挿絵が添えられていることが少なくない。<sup>19)</sup>本節では、ドイツ語圏で刊行された本の挿絵もあわせて紹介する。

昔、あるところに母やぎと七匹の子やぎがいた。ある日、母やぎは森に出かける。留守の間に、狼がやって来て食べようとするので、気を付けるよう、子やぎたちに言い聞かせてから出かける。

図1に描かれているのは、母やぎが出がけに子やぎたちに注意事項を言い聞かせる場面である。これは Ludwig Richter（1803-1884）による挿絵で、元来ベヒシュタインの昔話のために描かれたのだが、グリム童話の挿絵としてもよく用いられている。同様の場面を Heinrich Leutemann（1824-1905）<sup>20)</sup>、Oskar Herrfurth（1862-1934）<sup>21)</sup>、Hermann Vogel（1854-1921）<sup>22)</sup>、Bruno Grimmer（生没年不詳）<sup>23)</sup>らが描いている。どの絵においても母やぎは、籠を背負い、農具を持った姿で描かれているのだが、それは森へ食べ物を取りに出かけるためである。背負い籠の場合、母やぎは二



図1 Richter画 筆者蔵<sup>24)</sup>

足歩行をすることになり、人間と同様の洋服も身に着けていることが多い。Grimmerの絵の母やぎは、鎌も携行しているなど、それぞれの挿絵に特徴があるが、Richterの絵（図1）で秀逸なのは、後景に母子の様子を伺う狼の姿も描かれている点である。グリム童話の中では、この「狼と七匹の子やぎ」と「うさぎとはりねずみ」（グリム童話187番の話）は、どちらも動物たちが洋服を着た姿で描かれることが多い話なのだが、<sup>25)</sup> 擬人化されず、二足歩行もしないやぎの挿絵もわずかながらに存在している。有名なのはイギリスのArthur Rackham（1867-1939）<sup>26)</sup>のもので、そこではやぎたちは全く普通の動物として描かれている。

母やぎが留守であることを知り、狼がやって来る。戸を叩き、「開けておくれ。母さんだよ」と言い、家の中に入ろうとする。

狼が戸を叩く場面は、Vogel（図2）の他にもCarl Lindeberg（生没年不詳）<sup>27)</sup>らも描いている。Vogelによる図2が特徴的だが、これは「赤ずきん」の挿絵——狼が赤ずきんの祖母の家の戸を叩く場面——としても転



図2 Vogel画 個人蔵<sup>28)</sup>

用が可能なように見える。実際に「赤ずきん」の挿絵として、Theodor Hosemann (1807-1875)<sup>29)</sup> や Fritz Baumgarten (1883-1969)<sup>30)</sup> らが、祖母の家の戸を叩く狼の姿を、図2と同様に描いている。

子やぎたちは、声の主が狼だと気づく。「母さんはきれいな声をしている。おまえは声がしわがれているから、狼だ。」と答える。そこで、狼は店で石灰を買い、それを食べて声をなめらかにする。

石灰を購入する場面は、Eugen Rümmelein (生没年不詳) (図3) の他、Leutemann や Eugen Oßwald (1879-1960)<sup>31)</sup> が描いている。石灰はグリムのテキストでは、ein großes Stück Kreide (石灰の大きな塊ひとつ) と表現されている。Rümmelein (図3) と Leutemann は塊として描いているが、Oßwald が描いた狼は、飲みやすそうな粉末状のものを購入している。一方で、大きく開いた口にチョークを入れようとしている狼の姿を描いた絵もみられる。<sup>32)</sup> Kreide には「チョーク、白墨」という意味もあるため



図3 Rümmelein 画 筆者蔵<sup>33)</sup>

である。

狼が再びやって来て、「開けておくれ。母さんが帰ってきたよ」と言う。子やぎたちは、窓にかけられた足から、それが狼であることに気づき、「母さんの足は、黒くない。おまえは狼だ」と答える。

「狼と七匹の子やぎ」の中で頻繁に描かれる場面の一つは、ウーターによれば、やぎの家の前で中に入れてくれるように狼が頼む場面である。<sup>34)</sup> 確かにこの場面は数多く描かれており、興味深いため、ここでは三枚を比較してみたい。最初の二枚は家の中にいる子やぎたちの様子を中心に描いている。Grimmerによる図4では、戸のところに見えるのは狼の黒い前足のみだが、Paul Friedrich Meyerheim (1842-1915)による図5には、狼の顔も見える。実際には、子やぎたちが狼の顔を目にしていたら戸を開けないであろうから、これは不自然である。それでも読者は、いずれにせよテキストの表現から、戸を叩いているのが狼だと知っているため、筋を先取りして読者に知らせていることにはならない。

図5のような不自然さを解消するかのよう、Franz Müller-Münster (1867-1936)は、この場面を断面図として描いている。(図6) こうして



図4 Grimmer画 筆者蔵<sup>35)</sup>



図5 Meyerheim画 筆者蔵<sup>36)</sup>

家の中と外の様子が一枚の画面の中に収められている。Müller-Münsterも、グリム童話に多数の挿絵を描いているが、ユーゲントシュティールの美しい装飾が特徴的である。

狼はパン屋のところに行き、パン生地を足に塗らせる。続いて、粉屋を訪ね、白い粉をふりかけさせる。

Leutemannによる図7は、本のサイズに合わせた大判の別丁図版で、一枚に複数の場面を配している。図8は、図7の部分（上部）の再掲だが、三つの場面が描かれている。左はパン屋の場面、右は粉屋の場面である。パン屋はブレッツェル（八の字パン）と、粉屋は水車もしくは風車と共に描かれることが多い。図8の右奥にも水車があるが、その車輪はかすかに見える程度である。1884年（推定刊行年）の童話集にもLeutemannによるほぼ同様の挿絵が掲載されているが、<sup>37)</sup>そこには、狼の後方に水車小屋が明瞭に描かれている。



図6 Müller-Münster 画 筆者蔵<sup>38)</sup>



図7 Leutemann 画 個人蔵<sup>39)</sup>

狼は三度目にやぎの家へ行く。足が白いため、子やぎたちは母親であると思い、戸を開ける。中に入ってきたのが狼だったため、子やぎたちは隠れるが、狼は子やぎを六匹見つけ、呑み込んでしまう。

狼が家に押し入る場面は、図8の中央にもあるが、他にも Grimmer な



図8 (図7の上部) Leutemann 画 個人蔵

どいくつもの例がある。子やぎたちが身を隠す様子が中心に描かれることもある。隠れる場所は、具体的には、テーブルの下、ベッドの中、ストーブの中、台所、棚の中、洗濯桶の下、柱時計の中、とテキストにはある。ここでの「棚」はドイツ語では Schrank (戸の付いた棚) としか書かれていない。挿絵からは、Grimmer は食器棚、Rümmelein は洋服ダンスと解釈していることが分かる。Oßwald や Lindeberg らは、棚に隠れるやぎの姿は描いていないため、どちらと解釈しているかは不明である。

母やぎが帰宅し、惨状に驚く。子やぎたちの名前を順に呼ぶと、時計の箱に隠れていた七匹目だけが返事をする。母やぎは助け出す。この子やぎが何が起きたかを伝える。母やぎは涙を流す。

Lindeberg (図9) や Walther Klemm (1883-1957)<sup>40)</sup> は、時計の箱の中から子やぎを助け出す場面を描いている。話を聞いた母やぎが、涙を流す場面も Grimmer (図10) らが描いているが、図10では母やぎがハンカチで目頭を押さえているのが特徴的である。他にも Oßwald が母やぎの泣く姿を描いているが、この母やぎは洋服は着ているが、ハンカチは手にして



図9 Lindeberg画 筆者蔵<sup>41)</sup>

いない。Lindebergによる図9では、母やぎは子やぎを助け出す際に既に涙を流している。テキスト上では、助け出した後に泣いたという描写があるが、継起順序としては、助け出す時点で既に涙を流していても不思議ではない状況である。

母やぎは悲しみにくれて、外に出て行く。子やぎもついていく。野原で狼が寝ている。狼の腹の様子から、呑み込まれた子らがまだ生きていると考え、鋏と針と糸を子やぎに持って来させる。狼の腹を切り開くと、子やぎたちが出てくる。六匹とも怪我ひとつしていない。

狼の腹に鋏を入れて切る場面は、Rümmeleinの図11の他、Herrfurthらも描いている。どちらの絵も彩色されているので、狼の体から血は流れ出ていないことが明らかだ。ぬいぐるみを切っているかの如くで、リューティの文体論における指摘——「血は一滴も流れていない」——を想起させる。<sup>42)</sup> 図12には、子やぎたちが出てくる瞬間が描かれているが、これも



図10 Grimmer 画 筆者蔵



図11 Rümmelein 画 筆者蔵

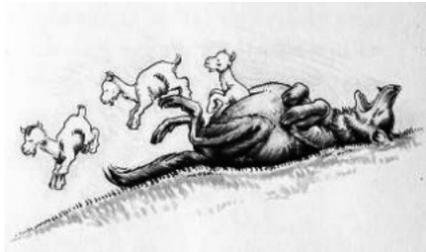


図12 Rümmelein 画 筆者蔵

コミック風に描かれており、リアリティはない。図11と12で狼が口を開けて寝ているのは、「いびきをかいている」ことを表現しているのだろう。一方で Herrfurth の描く狼は、口を開けて寝てはいない。

母やぎは、子やぎたちに石を集めさせ、狼の腹にそれを詰め、縫い合わせる。

救出された子やぎたちが石を集める姿もしばしば描かれている。図13は Fedor Flinzer (1832-1911) の絵だが、Oßwald や Grimmer も同様の絵を描いている。Curt Liebich (1868-1937)<sup>43)</sup> のように、母やぎが腹を縫い合わせる場面を描いていることもある。



図13 Flinzer 画 個人蔵<sup>44)</sup>



図14 Grimmer 画 筆者蔵

目を覚ました狼は、水を飲もうとして、石の重みで井戸へ落ちて死ぬ。

Klemm や Oswald も、井戸に落ちていく瞬間を描いている。

やぎたちは喜び、母やぎと一緒に井戸の周りを踊る。

母親と一緒に踊る場面も頻繁に描かれるものである。<sup>45)</sup> 井戸の形が円形であることが多いのは、やぎ達が輪になって踊る構図上、都合がよいためだろうか。Müller-Münster (図17), Baumgarten<sup>46)</sup>, Klemm, Leutemann,

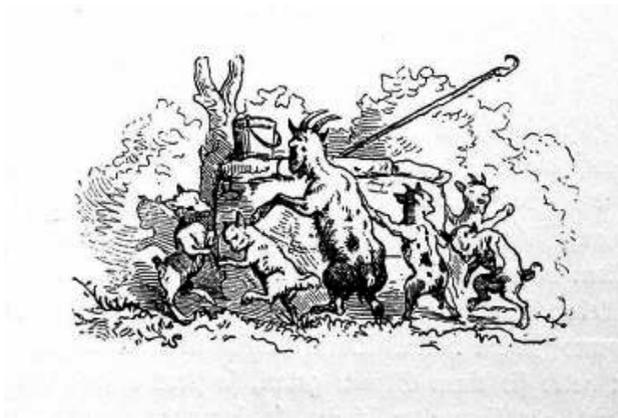


図15 Richter 画 筆者蔵



図16 Vogel 画 個人蔵

Lindeberg など多数の例がある。図14では、Grimmer が井戸に落ちる直前の狼を描いているが、ここでの井戸も丸い形をしている。一方で、四角い形をした井戸は Vogel (図16) や Herrfurth が描いている。

付言すれば、明治期の日本で最も頻繁に翻訳されたグリム童話が、この「狼と七匹の子やぎ」であった。<sup>47)</sup> 日本におけるグリム童話の初期の挿絵

は、絵師の名前が明記されておらず不明なものが多いのだが、和風のものと洋風のものに大別できる。和風の挿絵というのは、『おほかみ』（明治22年）に代表されるように、登場人物が着物姿をし、日本家屋に住んでいるものを指す。一方で洋風の絵も描かれたが、『八ツ山羊』（明治20年）は Leutemann の絵に影響を受けていることが明らかだ。そこで参照されたのは、本稿図7とほぼ同じ挿絵であった。<sup>48)</sup> 大正5年刊の中島孤島訳『グリム御伽噺』を飾る美しい挿絵も洋風のものである。装丁と挿絵を担当したのは岡本帰一であった。『グリム御伽噺』の巻頭に置かれたのが「狼と七匹の小山羊」で、その挿絵の大半を、岡本は Oswald の挿絵を参考に描いている。<sup>49)</sup> さらに、この話の終結部を飾る挿絵は——出典などの明記は一切ないが——、本稿で紹介した Flinzer の挿絵（図13）に他ならない。ただし、「狼が死んだ！狼が死んだ！」というキャプションが付けられている。Flinzer による図13は、子やぎたちが狼の腹に詰めるための石を集め、母やぎに手渡している場面であり、この時点では、狼は何も気づかずに寝ているだけである。その後、目覚め、喉の渴きを癒そうとして井戸に落ちて死ぬのであるから、石を運んでいる時点で「狼が死んだ」と喜ぶのは少々気が早い。この挿絵はサイズが小さいため、やぎたちが踊っている場面と勘違いされたのだろう。この他、本稿図5の Meyerheim の挿絵も、日本で同様の「受容」をされた。グリム童話の初期の翻訳は、子ども向けの雑誌に掲載されることも多かったのだが、明治22年の『小国民』第4号の巻頭口絵は、Meyerheim による図5を手本に彫られている。西洋文化に馴染みの薄かった時代でもあり、日本の初期の洋風の挿絵は、何らかの手本を用いていることが少なくない。<sup>50)</sup>

### 3. 「狼と七匹の子やぎ」の構造

#### 3.1. プロットの31の機能

前節で確認した「狼と七匹の子やぎ」のあらすじを踏まえて、プロットの構造を考察する。

プロットが「魔法昔話に認められる機能の数は、限られている」という結論に達したことは冒頭で述べたが、その機能の数とは、31である。具体的な分析を行う前に、この31の機能の概略を示しておく。記号は邦訳版『昔話の形態学』に拠る。<sup>51)</sup>

- α 《導入の状況》 (これは、プロットは機能のうちには含めていない。)
- β 《留守》 家族の成員のひとりが家を留守にする
- γ 《禁止》 主人公に禁を課す
- δ 《違反》 禁が破られる
- ε 《探り出し》 敵対者が探り出そうとする
- ζ 《情報漏洩》 犠牲者に関する情報が敵対者に伝わる
- η 《謀略》 敵対者は、犠牲となる者なりその持ち物なりを手に入れようとして、犠牲となる者をだまそうとする
- θ 《幫助》 犠牲となる者は欺かれ、そのことによって心ならずも敵対者を助ける
- A 《加害》 敵対者が、家族の成員のひとりに害を加えるなり損傷を与えるなりする (もしくは a《欠如》 家族の成員のひとりに、何かが欠けている。その者が何かを手に入れたいと思う)
- B 《仲介・つなぎの段階》 被害なり欠如なりが〔主人公に〕知らされ、主人公に頼むなり命令するなりして主人公を派遣したり出立を許したり

する

- C 《対抗開始》 探索者型の主人公が、対抗する行動に出ることに同意するか、対抗する行動に出ることを決意する
- ↑ 《出立》 主人公が家を後にする
- D 《贈与者の第一機能》 主人公が〔贈与者によって〕試され・訊ねられ・攻撃されたりする。そのことによって、主人公が呪具なり助手なりを手に入れる下準備がなされる
- E 《主人公の反応》 主人公が、贈与者となるはずの者の働きかけに反応する
- F 《呪具の贈与・獲得》 呪具〔あるいは助手〕が主人公の手に入る
- G 《二つの国の間の空間移動》 主人公は、探し求める対象のある場所へ、連れて行かれる・送りとどけられる・案内される
- H 《闘い》 主人公と敵対者とが、直接に闘う
- J 《標づけ》 主人公に、標がつけられる
- I 《勝利》 敵対者が敗北する
- K 《不幸・欠如の解消》 発端の不幸・災いか発端の欠如が解消される
- ↓ 《帰還》 主人公が帰路につく
- Pr 《追跡》 主人公が追跡される
- Rs 《救助》 主人公は追跡から救われる
- O 《気付かれざる到着》 主人公がそれと気付かれずに、家郷か、他国かに、到着する
- L 《不当な要求》 ニセ主人公が不当な要求をする
- M 《難題》 主人公に難題が課される
- N 《解決》 難題を解決する
- Q 《発見・認知》 主人公が発見・認知される
- Ex 《正体露見》 ニセ主人公あるいは敵対者（加害者）の正体が露見する

- T 《変身》 主人公に新たな姿形が与えられる  
 U 《処罰》 敵対者が罰せられる  
 W 《結婚》 主人公は結婚し、即位する

以上が31の機能全てであるが、個々の機能の継起順序には、移動があったり、欠落したりすることもある。そして、全ての魔法昔話に、上記の機能が全て含まれるわけではない。<sup>52)</sup>しかし全体としてみれば、「機能の継起順序は、常に同一である」という帰結に至る。

登場人物についても、「敵対者（加害者）」「贈与者（補給係）」「助手」「王女とその父」「派遣者」「主人公」「ニセ主人公」の七人に集約されることをつきとめ、それぞれの行為領域も基本的には決まっていると結論付けた。<sup>53)</sup>

そして、中間機能として現れる H-I と M-N は組み合わせにパターンがあり、4つの類型があるとしている。これを図示すれば以下ようになる。

$$A B C \uparrow D E F G \left\{ \begin{array}{cc} H & I \\ & J \\ M & N \end{array} \right\} K \downarrow Pr-Rs O L Q Ex T U W$$

図式がAから始められているのは、31の機能のうち、 $\alpha$ から $\theta$ までは「予備部分」であるためである。プロップが中核とみなすのは、その後に始まる部分なのである。

形態学の立場からいえば、「加害」(A)あるいは「欠如」(a)から始まり、いくつかの中間の機能をへて、「結婚」(W)なり、結末として用いられるその他の機能なりで終る展開であれば、これはすべて、魔法昔話と呼びうるものです。<sup>54)</sup>

そして、『昔話の形態学』の巻末に掲載された「昔話分析表」に、46話

の分析結果が表の形で提示されているが、予備部分は省略され「加害」(A)以降の機能のみが記載されている。

では、プロップが抽出した構造は、グリム童話の中の魔法昔話にも当てはまるのだろうか。プロップは、グリム童話に関しては次のように述べているのみである。

グリム兄弟の童話にも、全体的には同じ図式が認められはしますが、その図式はすでに〔アフナーシェフの場合ほど〕純粹でもなければ、安定していません。<sup>55)</sup>

グリム童話の構造は、日本の森田が、プロップにならって分析した結果を図式として報告している。<sup>56)</sup> ただし、そこで考察対象とされたのは「魔法昔話」に分類されるグリム童話84話のみである。アールネ・トンプソンの『昔話のタイプ・インデックス』で「動物昔話」とされる「狼と七匹の子やぎ」は、考察の対象外とされているのである。本稿ではその分析を試みる。<sup>57)</sup>

### 3.2. 「狼と七匹の子やぎ」の構造

以上のプロップの構造に照らして考えれば、グリムの「狼と七匹の子やぎ」は、以下のような分析結果となった。

昔、あるところに母やぎと7匹の子やぎがいた。… $\alpha$ 《導入の状況》。これはプロップは機能とみなしていないため、以下の図式には含めない。

母やぎが森に出かける。… $\beta$ 《留守》。まさしく「家族の成員のひとりが家を留守にする」状況で、プロップが挙げる「年長の世代に属する人物の留守(外出)」 $\beta^1$ に相当している。

母やぎが、狼に気を付けるよう言う。… $\gamma$ 《禁止》。狼が来ても戸を開けるな、という明確な禁止である。プロップは、「昔話は、ふつう、初めに、外出・留守についてふれ、その後で禁止についてふれているが、「実際には、出来事の継起順序は、その逆」だと指摘している。<sup>58)</sup> ここでも、母やぎは子どもに注意をした後で出掛けるため、以下の図式には継起順序に従って示す。

母親の留守を知り、狼がやってくる。… $\delta$ 《違反》。子やぎたちが実際に違反をする（＝戸を開ける）のは時間的には少し後になるが、プロップが指摘する「違反」の項目の以下の記述に一致するためここに含めた。「ここで、話の中へ新しい人物が登場します。この人物は、主人公に対する敵対者（加害者）と呼ぶことができます」。<sup>59)</sup> ここでの敵対者は、言うまでもなく狼である。

狼が、母親になりすまし、戸を開けるよう頼む。… $\epsilon$ 《探り出し》（1）。 $\epsilon^1$ 「敵対者が、子供達の居場所、貴重なものその他の在り処を探り出す」に相当する。

「声がしわがれているから、おまえは狼だ」と子やぎたちが答える。… $\zeta$ 《情報漏洩》（1）。 $\zeta^1$ 「敵対者が、自分の問いに対する答えを得る」に相当する。

狼は石灰で声をなめらかにする。… $\eta$ 《謀略》（1）。 $\eta^3$ 「それ（説得や呪具）以外の欺いたり乱暴したりする手段を使う」に相当する。

狼が、母親になりすまし、戸を開けるよう頼む。… $\epsilon$ 《探り出し》（2）。「母さんの足は、黒くない。おまえは狼だ」と子やぎたちが答える。… $\zeta$

《情報漏洩》(2)。

狼は、足にパン生地を塗り、白い粉をふりかける。… $\eta$ 《謀略》(2)。

これらは、一度目の $\varepsilon$ と $\eta$ と同様である。図式では、プロップにならない、まとめて示す。

足が白いため、子やぎたちは母親であると思い、戸を開ける。… $\theta$ 《幫助》 $\delta$ 《違反》。「犠牲となる者は欺かれ、そのことによって心ならずも敵対者を助ける」=「幫助」に相当する。その結果、禁じられていたにも関わらず、戸を開けるといふ《違反》が行われている。

以上が「予備部分」である。本稿では、プロップが『昔話の形態学』本文中で示した図式と同様に「予備部分」も含めて図示する。

狼は家の中に入る。子やぎは隠れる。狼は六匹を見つけ出して呑み込む。…A《加害》。「敵対者が、家族の成員のひとりに害を加えるなり損傷を与えるなりする」。ここでは、六匹であるが、ひとまとまりとして捉えられている。

時計の箱に隠れていた七匹目が、母親に事件を伝える。…B《仲介・つなぎの段階》。B<sup>1</sup>の「被害が知らされる」も近いが、プロップは、B<sup>1</sup>からB<sup>4</sup>までは「探索者型の主人公に属する」ものとしている。<sup>60)</sup>ここでは、B<sup>7</sup>の「嘆きの歌がうたわれる」が最も近いと考える。歌うのは「生き残った兄弟その他」で、「この歌のおかげで、災い・被害が知らされて、対抗の行為がよびおこされる」るのである。七匹目の話から留守中の出来事を知った母やぎが、なぜ家を出ていくのかはグリムのテキストには明記されていない。母やぎが明確な「探索」の意図をもたずに出立していると考えるのは、寝ている狼を偶然に見つけ出し、その時に初めて、子やぎに裁縫道具を取りに家に戻らせているからである。こうしたことから、本稿では、母

やぎによる探索者型の昔話ではなく、子やぎたちが主人公の被害者型の昔話として考察する。<sup>61)</sup>

野原で寝ている狼の腹を切り開く。…H《闘い》。実際に闘うわけではないが、ここでは、母やぎが子やぎに鉄などを取りに行かせ、狼の腹を切っているのをHとみなした。

子やぎたちが出てくる。狼の腹に石を詰め縫合する。…I《勝利》。ここでは、I<sup>5</sup>「敵対者が予め闘わずして殺される」の例の「蛇は眠ったまま、殺される」<sup>62)</sup>が最も近い。

六匹とも無傷である。…K《不幸・欠如の解消》。六匹とも無事で、A《加害》が解消されている。

目覚めた狼は、井戸に落下し死亡する。…U《処罰》。敵対者が、射殺されるか、追放されるか、自殺するかなどする、とプロップは例示している。<sup>63)</sup>ここでは、井戸に落ちて死んでいる。

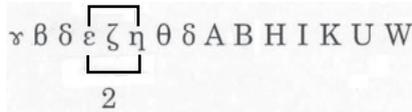
やぎたちは喜び井戸の周りを踊る。…W《(結婚)報賞》。一般的な魔法昔話では、主人公が「結婚し、即位」するが、「金銭その他の形での報賞を得る」場合もあり、それをプロップはW<sup>3</sup>としている。これが該当すると思われる。井戸の周りを踊る場面は、挿絵においても多数描かれていることは既に述べたが、それは、昔話の終わりを象徴する重要な出来事として広く認識されているということでもあるだろう。



図17 Müller-Münster 画 筆者蔵

ここでも井戸は丸く描かれている。ユーゲントシュティールの美しい挿絵の一つである。

以上の分析結果を図示すれば以下のようなになる。



以上の考察からは、プロップが明らかにした構造が「狼と七匹の子やぎ」にも——予備部分も含めて——よく当てはまることが分かる。

プロップは、昔話の構造に関しては、一般的に、「多くの機能が、対をなして配置されている」ということも指摘している。具体例としては、「禁止 (γ)」と「違反 (δ)」、 「探り出し (ε)」と「情報漏洩 (ζ)」、 「闘い (H)」と「勝利 (I)」、 「追跡 (Pr)」と「救助 (Rs)」の四組がペアとして挙げられている。<sup>64)</sup>最後の「追跡」と「救助」のペアを除く三組までもが「狼と七匹の子やぎ」に対で表れていることも注目できる。なぜなら、プロップも指摘しているように、個々の昔話に全ての機能が出現するわけではないからである。

本節での考察は、アールネ・トンプソンのインデックスでは「動物昔話」に分類される「狼と七匹の子やぎ」が、構造という観点からみれば「魔法

昔話」と同じであることを示している。

## おわりに

アールネ・トンプソンにおける「動物昔話」の分類への疑念は、プロップ自身も『昔話の形態学』の中で、次のように述べている。「ただ、やや奇妙なのは、動物説話が、あたかも、本来の昔話ではないかのようにみなされていることです。」<sup>65)</sup>そして、主な分析対象はアフナーシェフの魔法昔話に限定しつつも、動物昔話にも目を向けてはいた。プロップは、「少数の動物昔話や短編小説にも、まったく同じ構造が認められ」<sup>66)</sup>ると指摘をしていることから、それが分かる。

グリム童話の「狼と七匹の子やぎ」が、構造という観点からみれば「魔法昔話」と同じであることは、既に述べた。しかし、こうした事実は、アールネ・トンプソンのインデックスの有用性を否定するものではない。分類上の問題点を踏まえた上で、使いこなす必要があるということである。

最後に前節で紹介した挿絵を思い出したい。それらをよく検討すれば、本稿3.2で考察した構造と合致するものが多いことに気付く。本稿で紹介した挿絵を、プロップの構造に当てはめるならば、以下のようになる。

図1 =  $\beta \gamma$ , 図2 =  $\delta \epsilon$ , 図3 =  $\eta$ , 図4 ~ 6 =  $\epsilon$ , 図7 =  $\eta A \eta \beta W$ ,  
 図8 =  $\eta A \eta$ , 図9 ~ 10 = B, 図11 = H, 図12 = I, 図13 = I K, 図14 = U,  
 図15 ~ 17 = W

このような考察をふまえれば、昔話の挿絵は画家が思い付いたままに描いたものではなく、昔話にとって重要な要素（すなわちプロップがいう構

造に合致するもの)を描いていることが分かる。むしろ、画家の創造力が刺激され、テキストにはないものが描かれる場合もあるが、主なものはプロップの構造に重なるのである。この重なりにより挿絵が昔話の本質的な部分を示していることは明らかである。

#### 注

- 1) プロップ「魔法昔話の構造的・歴史的研究」40頁より。ウラジーミル・プロップ『魔法昔話の研究』齋藤君子訳、講談社学術文庫、2009年所収。
- 2) アファナーシエフは、グリム兄弟の仕事にならって、『ロシア昔話集』を刊行した。初版は、1855年から63年までの間に、8回に分けて刊行された。邦訳は、古くは『世界童話大系 第5～6巻 露西亜篇』所収の中村白葉訳(世界童話大系刊行会、1924/25年)がある。これは以下の形で復刊された。『古典文庫 ロシア民話集 アファナーシエフ民話集』中村白葉訳、現代思潮社、1977年。その他の邦訳は、中村喜和編訳『アファナーシエフ ロシア民話集』(上下巻、岩波文庫、1987年)や金本源之助訳『アファナーシエフ ロシアの民話』(全4巻、群像社、2009-2011年)。
- 3) Aarne, Antti: Verzeichnis der Märchentypen. Helsinki 1910. (FFC No. 3)
- 4) 本稿で参照した版は以下のものである。Thompson, Stith: The Types of The Folktales. A Classification and Bibliography. Helsinki 1981. (FFC No. 184)
- 5) Uther, Hans-Jörg: The Types of International Folktales. 3 Bde. Helsinki 2004.
- 6) Enzyklopädie des Märchens. Hrsg. v. Kurt Ranke u.a. Berlin 1977ff.
- 7) 野村滋『グリム童話』ちくま学芸文庫、1993年、30頁。
- 8) ウラジーミル・プロップ『ロシア昔話』齋藤君子訳、せりか書房、1986年、60-61頁。その他、磯谷が「あいまいな分類」と呼んでいる。磯谷孝「ウラジーミル・プロップと構造主義」『東京外国語大学論集』20号、1970年、11-22頁。
- 9) 実際には、有名な話であれば、資料にAT番号が紹介されている。グリム童話の場合はRölekeの注釈などで調べることができる。Brüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen herausgegeben von Heinz Röleke. 3 Bde. Stuttgart 2010の第三巻の巻末の注釈が便利である。
- 10) 本稿では北岡・福田訳を参照した。ウラジーミル・プロップ『昔話の形態学』北岡誠司・福田美智代訳、水声社、1989年。20頁からの引用。以下、「プロップ 20頁」等と略記する。
- 11) プロップ35-40頁。
- 12) この英語訳は、10年後にAlan Dundesの序文を付けて再版された。本稿で参照したのは以下のペーパーバック版である。V. Propp: Morphology of the Folktale. Trans-

- lated by Laurence Scott. Second Edition Revised and Edited with a Preface by Louis A. Wagner / New Introduction by Alan Dudes. Austin <sup>18</sup>2005.
- 13) 本稿で参照したのは、以下のドイツ語版である。Propp, Vladimir: Morphologie des Märchens. Hrsg. v. Karl Eimermacher. Frankfurt a. M. 1975. これは1972年の Hanser 社版 (München) を再録したものである。
  - 14) 大木伸一訳『民話の形態学』ウラジミール・プロップ著、白馬書房、1972年。北岡誠司、福田美智代訳『昔話の形態学』の初版は1983年に白馬書房から刊行された。
  - 15) フランスの一般読者向けにトドロフが編集した『文学の理論』に収録された。その邦訳は1971年に刊行されている。ツヴェタン・トドロフ編『文学の理論』野村英夫訳、理想社、1971年。ドイツ語訳は、Eimermacher 編の1975年版に収録されている。これも1972年の Hanser 社版 (München) を再録したものである。
  - 16) Grimm, Jacob und Wilhelm: Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. 2 Bde. Göttingen 1857.
  - 17) 別巻として、「注釈集」があるが、これは1856年に刊行された。
  - 18) 1825年以降、グリム兄弟は、50話からなる選集として「小さい版」の『グリム童話集』も刊行しているが、「小さい版」には弟ルートヴィヒによる銅版画を七枚掲載している。
  - 19) 当時の著作権(没後30年)が消滅した1893年以降はとりわけ多数刊行された。Freyberger, Regina: Märchenbilder - Bildermärchen: Illustrationen zu Grimms Märchen 1819-1945. Über einen vergessenen Bereich deutscher Kunst. Oberhausen 2009, S. 69.
  - 20) Deutsche Kinder-Märchen: 12 Lieblingsmärchen für die Jugend. Mit 72 Farbdruckbildern nach Aquarellen von C. Offerdinger u. H. Leutemann. Stuttgart / Leipzig [1884]. 以下の拙論に Leutemann による挿絵を掲載した。西口拓子「本邦初のグリム童話の翻訳絵本『八ツ山羊』と、それに影響を与えたとみられるドイツの挿絵について」『専修大学人文科学研究月報』第257号、専修大学人文科学研究所、2012年、17-33頁。
  - 21) Oskar Herrfurth: Brüder Grimm, Der Wolf und die 7 Geißlein. Wien. (Uvachrom 社の絵葉書。1920年代)
  - 22) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Illustriert von Hermann Vogel. München 1894.
  - 23) Der Wolf und die sieben jungen Geißlein. Märchen von den Brüdern Grimm. Mit Bildern von Bruno Grimmer. Nürnberg [1927].
  - 24) もともとベヒシュタインの『ドイツ童話集』(1853年) のために描かれた挿絵であった。Ludwig Bechstein's Märchenbuch. Mit 174 Holzschnitten nach Originalzeichnungen von L. Richter. Leipzig 1853. 筆者が所蔵するのは以下の版である。Ludwig Bechstein's Märchenbuch. Mit 84 Holzschnitten nach Originalzeichnungen von L.

- Richter. 49. Auflage. Leipzig. (刊行年の明記はないが19世紀後半とみられる。)本稿では、初出時のみ挿絵の出典を挙げる。後に画家の名前のみを言及している場合には、初出と同じ出典からの挿絵を意図している。
- 25) Freyberger 2009 S.209f. 「狼と七匹の子やぎ」においても、RichterやLeutemannは、狼には洋服は着せていない。洋服を着た狼を描いたのはVogel(1894年)が最初だという。Freyberger 2009 S.210. 本稿図2を参照。
- 26) Fairy Tales of the Brothers Grimm. London 1900.
- 27) Der Wolf und die sieben Geißlein. Märchen. Mit Bildern von Karl Lindeberg. [推定Fürth 1939頃].
- 28) Dr. Regina Freyberger 個人蔵。
- 29) Das kleine Rotkäppchen. Ein Kinder-Märchen mit 16 Bildern von Theodor Hosemann. Frei aus dem Französischen von Gustav Holting. Berlin 1840. ほるぷ出版による1842年版の復刻版がある。テオドール・ホーゼマン絵『白雪姫』(復刻世界の絵本館 ベルリン・コレクション) ほるぷ出版, 1982年。
- 30) Rotkäppchen. Märchen von den Brüdern Grimm. Mit Bildern von Fritz Baumgarten. Nürnberg [1930頃].
- 31) Der Wolf und die sieben jungen Geißlein. Gezeichnet von Eugen Oßwald. Mainz [1929頃, 初版は1910年].
- 32) 一例として、現在手ごろな価格で販売されている以下の小型の絵本の挿絵がある。Grimms Märchen. Der Wolf und die sieben Geißlein. Nacherzählt und illustriert von Eleni Zabini. Hamburg 2013. “Nacherzählt (語り直した)”と明記されているように、テキストは少々変えられているが、該当箇所はグリムのテキストとほぼ同様に ein Stück Kreideとなっている。
- 33) Der Wolf und die sieben jungen Geißlein. Mit farbigen Bildern von Eugen Rümmelein. Potsdam 1939.
- 34) Uther, Hans- Jörg: Handbuch zu den «Kinder- und Hausmärchen» der Brüder Grimm. Entstehung — Wirkung — Interpretation. 2., vollständig überarbeitete Auflage. Berlin / Boston 2013, S. 15.
- 35) Der Wolf und die sieben jungen Geißlein. Märchen von den Brüdern Grimm. Mit Bildern von Bruno Grimmer. Nürnberg [1927頃].
- 36) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Jacob und Wilhelm Grimm. Kleine Ausgabe. 33. Aufl. Berlin 1885.
- 37) Leutemannの挿絵に関しては、西口 2012年を参照。
- 38) Brüder Grimm. Schönste Märchen. Mit vielen Bildern von Kunstmaler F. Müller-Münster. Reutlingen 1924. 筆者の所蔵する版は推定1937年刊行である。
- 39) Märchen-Wundergarten. Eine Sammlung echter Kindermärchen. Herausgegeben von T. Hoffmann. Stuttgart 1893.

- 40) Das Märchen vom Wolf und den sieben Geißlein. Mit 5 Holzschnitten von Walther Klemm. Weimer 1922.
- 41) Der Wolf und die sieben Geißlein. Märchen. Fürth [1939頃].
- 42) リューティは、「七羽の鳥」の少女が、兄たちを救出するために指を切る時の描写について、こう述べている。「苦痛の叫びもなければ、血すら一滴も流れていない。ましてや体に切り傷は生じていない。まるで紙人形の指が切り取られたかのようにある。」マックス・リューティ『昔話の解釈』野村滋訳、ちくま学芸文庫、1997年、29頁。
- 43) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Neu ausgewählt und herausgegeben von Paul Benndorf. Mit 16 Buntbildern und vielen schwarzen Bildern von Curt Liebich. Leipzig [1925頃].
- 44) Kinder-Märchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. In neuer sorgfältiger Auswahl. Mit Illustrationen von E. Klimsch, V. Mohn, A. Zick, F. Reiß, F. Flinzer, W. Claudius, P. Schnorr, Chr. Votteler, E. Dolleschal u. a. Stuttgart 1894. Dr. Regina Freyberger 個人蔵。
- 45) Uther 2013 S. 15.
- 46) Titania Verlag が2013年に復刻版を刊行している。Der Wolf und die sieben Geißlein. Mit Bildern von Fritz Baumgarten. Fränkisch-Crambach 2013.
- 47) グリム童話の翻訳作品別目録には、明治時代だけでも17の翻訳が記録されている。川戸道昭他編『児童文学翻訳作品総覧 第四巻』大空社、ナダ出版センター、2005年、564-566頁。中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育学』臨川書店、2009年、13-16頁参照。
- 48) 西口 2012年参照。
- 49) 岡本が、複数の挿絵画家の絵を参照していることは、以下の論文で示した。西口拓子「岡本帰一に影響を与えたドイツの挿絵画家たち——『グリム御伽噺』を例として」『専修大学人文科学研究年報』第44号、専修大学人文科学研究所、2014年、171-196頁。
- 50) 同様に、Meyerheim の「白雪姫」の挿絵が、『小国民』に明治23年に連載された「雪姫の話」の挿絵として利用された。西口拓子「挿絵が語る明治期「グリム童話」の受容」『遠野学』赤坂憲雄責任編集、荒蝦夷、2014年、68-79頁。
- 51) 邦訳は、ロシア語版の第二版（1969年）に拠るが、機能を表す記号は「ロシア文字からラテン文字に改めた」と凡例にある。本稿では、英語訳とドイツ語訳も適宜参照した。邦訳の記号は、英語版と同じで、ドイツ語版とは異なっている。
- 52) 全ての機能を備えた話を人工的に作成した例は、以下を参照。樋口淳『民話の森の歩きかた』春風社、2011年、128-129頁。
- 53) プロップ125-132頁。
- 54) プロップ148頁。

- 55) プロップ161頁。
- 56) 森田浩子「グリムのメルヘンの構造—プロップの理論による分析—」『岡山大学独  
 仏文学研究』第13号, 岡山大学文学部言語文化学科ヨーロッパ言語文化論講座, 1994  
 年, 37-53頁。森田浩子「グリムのメルヘンの対機能について」『岡山大学独仏文学  
 研究』第14号, 岡山大学文学部言語文化学科ヨーロッパ言語文化論講座, 1995年, 195-  
 206頁。森田は、プロップが省略している「予備部分」も含めて図式として掲載して  
 いる。
- 57) 以下の「ふたり兄弟」「灰かぶり」「がちょう番の娘」の構造分析を参照した。野  
 村滋『もっと知りたいグリム童話』筑摩書房, 2004年, 17-34頁。
- 58) プロップ43頁。
- 59) プロップ45頁。以下, プロップ351-356頁の略語の一覧表も参照。
- 60) プロップ58頁。
- 61) アファナーシェフの『昔話集』の53番に「狼と雌やぎ」という似た話がある。こ  
 の話のプロップによる分析結果は、以下の通りである。 $\gamma' \beta' \delta' A' B' C \uparrow I' K' \downarrow$  (プ  
 ロップ162頁, 英語版 p.101) この B' 「被害が知らされる」との分析結果からは、プ  
 ロップが母やぎを探索者型の主人公と見なしていたことが分かる。そのため≪出立  
 ≫ (↑) も行われているのである。  
 この話は、邦訳版には訳出されていないようであるが、以下にあらすじが紹介さ  
 れている。(「おおかみとやぎ」『ロシア民話選』宮川やすえ訳, 明石書房, 1996年, 227-  
 228頁。) トルストイによる再話には翻訳がある。(「おおかみと子やぎたち」『ロシア  
 の昔話』内田莉沙子編・訳, 福音館文庫, 2002年, 253-259頁。)
- 62) プロップ82頁。
- 63) プロップ97頁。
- 64) プロップ99頁。
- 65) プロップ19頁。
- 66) プロップ160頁。